

特別講演会



Institute for Research
in Humanities
Kyoto University



Scuola Italiana di Studi
sull'Asia Orientale
ISEAS



École Française
d'Extrême-Orient
EFEO

THE DEVELOPMENT OF COLOSSAL IMAGES WITHIN THE BUDDHIST TRADITION OF SOUTH ASIA

PIA BRANCACCIO 教授 (ドレクセル大学)

2019年7月27日(土) 午後2時

京都大学人文科学研究所本館セミナー室1



仏教文化における大仏の出現および様々な文化世界におけるその熱心な受容は、仏教美術研究の中では見過ごされがちな主題である。かつてアフガニスタンのバーミヤーン渓谷を見下ろしていた大仏に最もよく示されているような、仏陀の巨大図像の制作は、仏教実践の歴史の中における重要なエピソードである。8世紀までには、大仏は中央アジアから中国、あるいは西インドからスリランカに到る仏教世界で受容されていた。しかしながらこの重要な宗教現象の性格や重要性は十分明らかになっておらず、詳しく研究されねばならない。本講演は多角的な視点から巨大な仏像を分析することを試みる。如何にして、何時、何故にこの潮流はインド亜大陸の北西部において出現したのか、特定の芸術的方法や技法が巨大仏像の想像にとっていかに有用であったのかを問い、西インドからスリランカにおよぶインド洋ネットワークをまたいだ巨大仏像の分布を跡づける。そのうえで、巨大仏像が、国家を越えた仏教的景観の創出に果たした重大な役割を考察する。

Pia Brancaccio博士は現在、フィラデルフィアにあるドレクセル大学芸術・芸術史学科の教授職にある。Maurizio Taddei教授のもとナポリ東洋大学(イタリア)においてインド美術史・考古学の分野で学位を取得し、イタリア・パキスタン考古調査団と長年にわたって共同研究を行っている。Brancaccio教授は古代南アジア、とくにガンダーラとデカン高原を中心としつつ、仏教美術に関する幅広い研究を行っている。主な出版物としてはアウランガーバード仏教石窟に関する専著 *Transformations in Art and Religion* (Brill, 2010), *Living Rock: Buddhist, Hindu and Jain Cave Temples in Western Deccan* (編著, Marg, 2013), *Gandharan Buddhism: Archaeology, Art and Text* (Kurt Behrendtと共編著, UBC Press, 2006)があり、また *Ars Orientalis*, *Archives of Asian Art*, *EDast and West*, *South Asian Studies* 等の学術雑誌や、学会論文集に多くの論文を発表している。



主催： 人文科学研究所共同研究「前近代内陸アジアとその隣接地域の社会と文化」(稲葉穰)

科研費基盤研究「バーミヤーン壁画の描き起こし図の作成とその美術史的研究」(宮治昭)

問い合わせ：人文科学研究所稲葉研究室 (075-753-6968)